

海外留学と社会的知性の育成

宮崎国際大学国際教育部長 西村 直樹

Naoki Nishimura

はじめに

宮崎国際大学では2年次の秋学期(約16週間)に海外研修が必修となっている。これは1994年の開学以来本学のカリキュラムに組み込まれており、英語で授業を行う「国際的リベラル・アーツ大学」を標榜する本学にとっては教育上極めて重要な位置を占めている。詳細については、「IDE:現代の高等教育」(No.526(p.27-p.30)「国際的リベラル・アーツ教育と海外研修」)、あるいは、宮崎国際大学ホームページ(「報道メディアに見るMIC」)に同様の原稿が掲載されているのでご覧いただけたら幸いである。

今回日本学生支援機構より「海外留学と就職」をテーマに寄稿を依頼された際に私の頭にすぐ浮かんだのは、その趣旨が、昨今よく聞かれる「グローバル人材(「人財」と書かれることもある)」育成における海外留学の有用性であろうということであった。本稿はその趣旨を踏まえて論を進めたい。グローバル人材の定義はその使われる文脈、組織によって多々有り、曖昧模糊としているところもあるが、代表的なものとしては以下が挙げられる。

経済産業省が掲げる「グローバル(産業)人材」の定義は、「日本語の堪能な外国人留学生、及び外国語に堪能で外国事情に詳しい日本人学生等、企業が海外ビジネスを展開するに当たって活躍できる人材。」であり、文部科学省の諮問機関である、グローバル人材育成委員会の最終報告書「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」(2011年4月28日発表)によると、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人材」となっている。

本稿は、上記定義を念頭に置きながら、学生は海外留学をすることによって何を得、また、彼らにどのような変化が期待できるかについて、本学学生の観察及びその分析も加味した上で私見をまとめたものである。そしてその結論は、奇しくも上記グローバル人材育成委員会の報告書にあるグローバル人材としての素養と多く符号することとなった。特に海外留学体験が、「異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性」という、語学の向上や異文化理解といったスキルや知識の習得よりも、社会に生きる人間として必要不可欠な「社会的知性」(ダニエル・ゴールマン、2007)の育成、向上に大きく寄与すると考える点を強調したい。

1. 社会的知性とは何か

ダニエル・ゴールマンは、その著書「生き方の知能指数」(p.132-133) (日本経済新聞出版社)の中で、社会的知性を大きく2つに分類している。その一つは「社会的意識」(他人について感じとることができる能力)であり、その内容として以下の能力を挙げている。

- 原共感 他者の感情に寄り添う能力
- 情動チューニング 全面的な受容性をもって傾聴する能力。相手に波長を合わせる能力
- 共感的正確性 他者の思考、感情、意図を理解する能力
- 社会的認知能力 社会のしくみを知る能力

もう一つは「社会的才覚」(感じとった上でどう動くのかを決める能力)であり、その能力を以下に分類している。

- 同調性 相互作用を非言語的レベルで円滑に処理する能力
- 自己表現力 自分を効果的に説明する能力
- 影響力 社会的相互作用の結果を生み出す能力
- 関心 他者のニーズに心を配り、それに応じて行動する能力

私は全くの門外漢であるが、近年、社会神経科学の進歩がめざましく、人間関係をつかさどる脳の領域が特定できるようになり、「社会脳」(「人間が相互関係を処理する際に活躍するいくつかの神経回路を集合的に示す」)の研究が進むとともに、一般知性とは別の概念として、社会的知性が注目されているという。

私がこの概念に興味を持ったのは、昨今「コミュニケーション能力」という言葉が盛んに使われ、その重要性が社会で、就職活動で、ひいてはキャリア教育という形で高等教育機関でも強調される一方で、それが一体どういう意味を持つものかについての共通理解がないまま一人歩きしていることに常に疑問を持っていたからである。社会的知性の概念は、その科学的検証と理論から、その疑問に極めて明快に答えてくれている。高度にハイテク化した現代、必要な情報は指で軽く触れるだけでいつでも入手することができ、また、多くの若者は、他人との繋がりをサイバースペースという顔が見えない空間で完結させている。このような現況下、社会が求める「コミュニケーション能力」をいかに学生に身につけさせるかを高等教育機関は真剣に考えなければならない。そしてその役割が単に知識の伝達だけではないことは火を見るより明らかだ。20代中頃まで発達すると言われる学生の社会脳をいかに活性化させ社会的知性を育成するか、それが今、我々大学人が考えなければならない大きな課題であると思う。

2. 海外留学神話

日本人の海外留学は年々減少し、2009年には59,923人(文部科学省発表)と、ピークであった2004年の82,945人と比べ、約23,000人(28%)減ったことは記憶に新しい。一方、隣国韓国の海外留学生数は、2009年は282,383人(韓国教育統計サービス教育統計年報(2010)による)、同年の中国は229,300人(中国教育部ホームページ

による)と、日本とは比較にならないほど多い。政府はこの現状を変えるべく、「新成長戦略」(2010年6月18日閣議決定)の中に、2020年までに実現すべき成果目標として、日本人学生等30万人の海外交流をうたっている。しかし、その目的としては、「国際的に活躍できる人材を育成する」くらいしか見えてこない。ただ海外留学さえすれば、「国際的に活躍できる人材」になるのだろうか。海外留学を長年に渡って経験した私の答えは、ノーである。もちろん、一人でも多くの日本人の若者が海外に出ることはいいことである。それを決して否定するものではないし、むしろ、そうなってほしいと願っている。しかし、海外に送り出すにあたって何を得てほしいと考えるのか、また、現実的に何を得てくることを期待するのかによって、送り出す側の指導が変わってくる。そしてその指導の質及び内容が、学生等の経験の質を変え、数からは見えない貴重な財産を日本社会に与えることになるのではないだろうか。

「国際的に活躍できる人材」になりたい、と願う人たちの多くが留学に求めるのが、語学力の向上、いわゆる、外国語によるコミュニケーション能力の向上であろう。私も仕事柄そういう学生、保護者の皆さんが多いことを知っているし、そう思うことは当然とも思っている。しかし同時に、そのことが現実的でないことも知っている。英語に限って言えば、留学すれば英語ができるようになる、というのは、まったくの神話と言わざるを得ない。もちろん、「英語ができるようになる」の定義にもよるが、少なくとも、ただ留学することによって「国際的に活躍できる人材」に必要な英語力が身につくことはない。特に大学生の海外における言語体験は、年齢的なこともあり、もともと身につけている言語能力(潜在的能力も含める)の伸長を促すことにそれなりの効果はあっても、それまでなかった言語能力を海外で新たに身につけることにおいては、ほとんどと言っていいほど効果はない。

例えて言うと、もともとしっかり植えていた苗木(盤石な英語の基礎力)があったとしたら、それが適切な水と陽光という環境下(海外)で育つことはあっても、何もないところからは新たな芽が出ることはほとんどないということである。このことは、TOEICテストで海外留学前と留学後の得点を比べてみると、ほとんどの学生のリスニングの得点は大きく上がるが、リーディングの得点はさほど大きく変わらないという、私がこれまで見てきたデータの分析結果からも明らかと言える(もちろん、例外は当然あるが)。これは、リーディングの得点を上げるのに必要な分析的(文法的)な言語能力は、その言語を分析的に見て勉強する時間と機会がある場所(日本)では身につくが、主に言語運用(聞く、話す)が優先される場所(海外)では、極めて限られた伸長しかみられないということの意味する。そして「国際的に活躍できる人材」に要求される英語力が、挨拶や生活上使われる日常の会話力ではなく、プレゼンテーション、交渉、説得、論理的文書作成等を可能せしめる分析的英語力であることを勧告すれば、ただ海外留学をすれば高い英語力が身につく、あるいは国際的に活躍できる人材になれる、ということが単なる神話であることは明白である。語学面で海外留学をより効果的なものとするためには、日本における十分な学習、また、日頃の学習習慣が極めて重要なのである。

3. 海外留学と脳のパラダイムシフト

では、海外留学は何に最も効果があるのか。先日、ある卒業生（ここからA君と呼ぶ）が私のところに訪ねてきた。A君は本学卒業後、3年ほど大手の一流証券会社に勤務していたが、しばらく前に辞表を提出し、今年中には起業する計画とのことであった。A君のことは、彼が高校2年生の時から知っており、本学入学後の4年間、その変化を見てきた。その彼に本学の海外研修（留学）が自分にどのような変化をもたらしたかと思うか、との質問を試みた。彼はしばらく考えたが、はっきりした答えは出てこなかった。ただ、海外（アメリカ）に行っているいろいろ苦勞したせいか、それまでの考え方、世界を見る目が何となく変わり、将来は起業したいと真剣に考えるようになったそうである。そしてその後5年経った今、その目的を果たすことになったという話をしてくれた。

A君は入学当初から英語力が高かったため、私の目には授業に手を抜いているように見えた時もあったことから、時折叱咤激励したことを懐かしく思い出す。その彼の態度に変化が見られたのが、海外研修後の3年次であった。その後は専攻分野の勉強に熱心に取組むようになり、また、課外セミナーを受講しファイナンシャルプランナーの資格を取得するなど、めざましい変貌ぶりを見せた。彼の卒業時のTOEICの得点は920点くらいであったと記憶している。実はこのような学生の変貌ぶりはA君に限ったことではない。海外研修前は他人と話す時にいつも目を外し、蚊の鳴くような声で話していたため、教員から「あの学生は大丈夫か」と言われていた学生が、海外研修後には話している相手の目をしっかり見て、はきはきと話すようになっていた様子を見た時の驚きは、今でも忘れられない。その学生にも当時その変貌ぶりについて聞いたことがあるが、その時もその学生はその変化について自分では気づいていなかった。このような例は枚挙にいとまがない。

なぜ他人からは明白とも言える、このような行動変化を自分自身が気づかないのか。それは彼らの社会脳にパラダイムシフトが起こったからだと考えれば理解できる。つまり、日本にいた時に行動を支配していた脳の神経回路（古いパラダイム）は、海外留学に行き、大きく異なる規範を持つ他の文化圏の人たちと接することで、その回路に変化が起こり、新たなパラダイムを形成したということである。それが意識せずに行き起こるため、その結果もたらされる自分の行動、思考の変化に自分自身は気づかないのである。異なる文化、価値観を持つ人々と円滑な人間関係を構築するには大きな認知的及び非認知的負荷がかかるものである。例えば、相手の顔色を見て、また、言葉の調子から相手が何を考えているかを推察するには、「社会的意識」を構成する一要素である社会的認知能力を総動員して状況判断をし、「社会的才覚」により、同調し、関心を示す必要に迫られる。しかし、社会的認知能力が育つためには、原共感と情動チューニングの上に共感的正確性の成立が必要とのことであるので、実は、異文化における新しい友好的人間関係作りには、社会脳をフル活用しなければならないということになる。ゴールマンは、「社会的相互作用には、人間の脳を変えていく働きもある。」と述べている。

海外留学という異文化体験は、不断に新しい社会的相互作用に自らを100%関与さ

せることを意味し、その結果として自らの社会脳を活性化し、変えていくことで、社会的知性の伸長がみられるのである。もちろん、異文化の人たちと積極的に関わろうとしなかったり、いつも日本人同士で行動をするようでは、脳に生産的変化が見られないのは言うまでもない。

4. 海外留学とキャリア教育

「IDE:現代の高等教育」の2010年6月号(No. 521)は、「大学とキャリア教育」を特集しており、多くの大学関係者が、現在大学に導入されている「キャリア教育」の趣旨がどこにあり、それを大学がどのような視点で本来の教育活動と関連づけていくべきかについて論議している。また、その多くが、キャリア教育とは何かという本質論でとまどいを覚えている点が印象的だ。本来大学教育は学生の卒業後のキャリア形成のための教育を主眼としているはずであり、そのキャリアとは、特定の専門的職業人を養成する大学を除いては、社会人として、また一個人として自律、また自立するための能力(コンピテンス)開発、人間形成を意味するものであり、「就職」と同義ではないはずである。しかし、現状はというと、キャリア教育は、多くの大学で就職活動のための準備教育になっている感が強い。それは社会的知識を教える教育であり、学生の社会との円滑な相互作用、あるいは、リーダーシップといった、実社会が本来求めている対人関係における知性(社会的知性)を育てるものとはなっていない。私は、真のキャリア教育とは、学生の社会的知性を育てる教育ではないかと思う。門外漢の私が社会神経科学の用語を使うのにためらいがないわけではないが、その言葉の持つ意味こそ、現代の若者をより良き社会人にし、ひいてはグローバル人材と言われる人材を育成する鍵のように思われる。

そして、社会的知性を育てるための教育として、海外留学は最適な教育ではないだろうか。もちろん、ただ留学すればいいというものではない。その経験を最大限有益にするための、日本における語学等の準備の必要性、また、積極的に異文化に飛び込み、多くの人々と交流し、共感し、戸惑い、悩むことに躊躇しない姿勢の重要性を強調したい。内向きと言われる現代の学生の社会的知性を育成する教育としての海外留学を、高等教育機関はただ学生の自発的行動に任せていいのだろうか。このままでは、ますます海外に留学する学生数は減ることになるのではないか。現代の風潮では、日本において学生の社会的知性を育てることは極めて困難と思われる。宮崎国際大学のように、海外留学(研修)をカリキュラム上必修化し、学生をホストファミリーという文化が全く違う新しい家庭環境に送り込み、多くの学習を好むと好まざるにかかわらず課すことが、今後の日本社会の発展に重要と考えるのは、やはりまだ少数意見であろうか。